
ユグドラシルの樹の下で

paiちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユグドラシルの樹の下で

【Nコード】

N7642Y

【作者名】

paiちゃん

【あらすじ】

俺の姉貴は1歳違いで隣に住んでいる。本当の兄弟じゃないけど、生まれたときから世話になってるらしい。そんな姉貴には密かな願いがあったようだ。異世界で暮らしたいって、そんな願いに俺は巻き込まれてしまった。さらには、異世界には危険が一杯って・・・なんでそんなの持つて来るんだよ。っていうか、何処で手に入れた！・・・まあ、異世界なら仕方ないかなって俺も流されてるし・・・とりあえず姉貴と2人でなんとかこの世界で暮していかないと・・・こんな決心で異世界暮らしを始める男の子の物語です。

俺の姉貴

小さな焚き火の前に座った俺に、姉貴は「はい！」ってカップを差出した。

夜の森は静かで、何の物音も聞こえない。

時折、薪のはぜる音がパチパチと小さく聞こえる。

隣で、カップのコーヒーをフーフー息を吹きかけながら飲んでいる姉貴を見ると、俺の視線を感じたのか、此方を見て微笑んでいる。全く余裕があると言うか、無頓着と言おうか・・・

そもそも、こんな所で焚き火をしている原因となったのも姉貴のせいだと思ってしまう。

昨日の夕方、家に来たかと思ったら、「明日は、キノコ狩りだよ！」と言って帰っていった。

それからが大変だった。

とりあえずザックを取出し中身をぶちまけて再度詰め直す。

エマージェンシーキット、緊急薬品、非常食、携帯調理用の鍋と食器、シエラカップに固形燃料・・・

さらに、マルチプライヤー、ナイフ、軍用水筒、そして着替え一式と予備の圧縮下着一式だ。

これだけ詰め込むとパンパンにザックが膨らむが、まだ、ポケットがある。そこに、お菓子を入れると準備完了だ。

玄関にGブーツを出しておき、部屋に戻ると、枕元に着ていく物を準備する。

ジーンズにGシャツ、トレーナーそれに厚手のソックスを畳んで置く。

最後に押入れの奥から、山菜採取用の鎌を取出す。

樫の杖だ。上部はネジが切っており、其処に鎌をねじ込むが、何と鎌は鍛造品、鎌と言うより鳶口を削って刃を付けたような形状だ

が、山菜取り用と言いいい訳ではしょうがない。

次の日、朝6時に起きて朝食のパンをコーヒーで流し込み玄関先で待つことしばし、トコトコと姉貴が同じような服装で現れた。

同じような服装には理由がある。

俺の服は、下着に至るまで姉貴の趣味で、姉貴が購入したものだ。
「はい。これをお願いね！」ってお金を渡す俺の母にも問題はあ
るのだが・・・

背負ったザックは俺よりも大型だ。

と言うことは、今回もとんでもない物を持って来たという事だ。
とんでもない物とは、組立て式の大型コンポジットクロスボー
ある。

「野犬は嫌い！」って言ってたが、あれで撃ったら野犬程度では
貫通するぞ！全く・・・

2人で小さな町並みを抜け、裏山の山道を登って行く。

キノコが近場にあるはずが無い。近場のキノコは老人の楽しみ。

俺達は更に上の山中を目指す。

途中の展望台で休憩を取ると、更に山道を登って行く。

道は次第に細くなり、終には獣道となる。それでも先に進む。軍
用コンパスと地図があれば現状位置の確定は可能だ。この手の訓練
は小学生時代からのオリエンテーリング大会で十分訓練を積んでい
る。

「あつた！」

姉貴が籠を振り回してはしゃいでいる。

見ると、大きな山栗の木がある。下には沢山のイガグリが落ちて
いた。

早速、イガグリをブーツで器用に剥きながら山栗をゲットする。数十個拾ったところで、再び獣道を進む。そして、日当たりの良い斜面で本命のキノコを取ることにした。

キノコは日当たりが良い場所には生えない。そんな場所の何時も木の陰になっているような場所に生えてくるのだ。

10個程取ったところで、姉貴の籠を覗く。沢山あるのだが・・・毒キノコが殆どだ。丁寧に鑑別して毒キノコを除いたところに俺が取ってきたキノコを入れる。

時計を見ると、昼を過ぎている。

姉貴が作った大きなオニギリを木陰で並んで食べる。

そして、さあ帰ろうかという時に、異変に気がついた。

太陽が雲に隠れ、山の下の方から霧がかかって来た。

急いで荷物を担いで山を下りる。しかし、道は獣道・・・何時しか異なる方角に進んでいることに気がついた。

昨夜の天気予報では今日は晴れのはずだ。朝からの日差しが原因であれば、さほど時をかけずに霧は晴れるはず。風が出れば更に早まる。

歩き続けて少し開けた場所を見つけたので、此处で休むことにする。

帰りが遅くなっても、姉貴と一緒にならば両親は心配しない。姉貴の家でもそうだ。ここは、動かずに霧が晴れるのを待つのが得策と考える。

霧は、時を経ても晴れる様子が無い。かえって濃密さが増している。

小さな焚き火を作ると、姉貴が簡単な夕食を作りはじめた。

姉貴は実の姉ではない。隣に住む矢上家の娘だ。俺と1歳程上になるが、俺が生まれた時から世話になったようだ。

俺の発した初めての言葉が「オネータン」だったらしい。ある意味、姉貴のオモチャ同然ではあったようだが、俺が歩き始めると常に付きまとい、面倒を見てくれたらしい。

矢上家は姉貴とお爺さんの2人暮らしで、お爺さんは合気道の道場を自宅で開いている。物心が付くか否かの頃から、姉貴と稽古をしていたようだ。

中学生になると直ぐに黒袴の資格を得て、今は年少組の指導までするようになった。

姉貴はさらに上を行って、中学生の指導をしている。さすがに、高校生以上の組については師範が指導しているが、このまま稽古を続けると卒業と同時に師範の資格を得ることが出来そうだ。

道場では、亜流ではあるが杖術として、4尺の杖を使った攻撃方法がある。これも、半ば強制的にお爺ちゃんに仕込まれた。

姉貴は高校生になると、合気道部ではなくバイトに勤しんだ。俺が高校に入ると半ば強引に付き合わされた。コンビニのバイトである。

バイトの給料は、全て変な装備に費やされた。日本の法規制を全く無視した調達網を姉貴は知っているらしい・・・道場に通っている変な外人にコネがあるみたいだ。

おかげで、海外の特殊部隊装備品が手に入ったが、こんな日本ですدوするの？っていうような物ばかり・・・刃渡り40cmのグールナイフなんて押入れに入れとくしかないが、今日は、ザックに収まっている。

こんな、怪しい2人だが、町の警察官には結構受けがいい。それは、コンビニのバイトで強盗を2件撃退しているからだ。しかし2件とも警察以外に救急車が必要となった。

最初の強盗は、姉貴が投げ飛ばした先にあるガラスドアを破ってガラスによる腹部裂傷・もう少して失血死だったらしい。

2度目は、俺の床モップによる攻撃で、鎖骨損傷、肋骨骨折となった次第である。

両方とも、正当防衛で処理されたが、やり過ぎないように嚴重注意を受けた上で、感謝状を頂いた。

今朝も、この格好で巡回の警察官と会ったが、姉貴の「キノコ取りに行くの！」に「気を付けて行けよ。野犬に注意してな！」という事で、済んでいる。

しかし、この霧は異常だ。夜になりさらに濃密さが増している。小さな焚き火に照らされた数mの空間のみが存在しているようにも感じる。

肩に重みを感じる。どうやら姉貴はエマジエンシートに包まって眠り込んだらしい。いつの間にか、姉貴を小さく感じるようになったが、それでも姉貴は170cmはある。俺が、180cm迄背が伸びたからなのか・・・

ガサ・ガサ・と何かが近づく音がする。

殺気は感じないが用心の為に、杖を直ぐ脇に寄せた。

茂みからガサリという音と共に現れたのは、小さな老人の姿をしていた。

しかし、老人が身に纏っているのは、着古した着物のようなものである。古木の杖について焚き火に近づくと、俺の対面の地べたに座る。

ジッとしている姿は苔生した石仏のようだ。

害がなさそうなのでほっておくことにした。触らぬ神に祟りは無

いつて言うじ。

「我を敬う者の子孫たる娘の願いを聞くことにした。．．お前の意思は知らねど、同行させる。お前達に与えるものは3つ、老いと病を防ぎ、言葉の理解、それに若干の体力向上．．娘の願い通り慎ましく生きよ．．」

一方的に話を終えると、立ち上がり霧の中に消えていく。
白昼夢？にしては、現実的だ。現に、老人の座った場所は草が倒れている。

ということとは、この霧は先ほどの老人の仕業とも考えられる。
俺達を迷わせ、此処へ導き、引導を渡す．．．ってことか。
ともあれ、明けない夜はない。明日にはこの霧も晴れるだろう。

霧が晴れて

どうやら朝になったようだ。

霧の明るさが増してきたが、見通しの悪さは、昨日のとおり周囲数m程度の見通し距離だ。

昨夜の怪異は幻だったのだろうか・・時間が経てば経つほどに、現実味が無くなってきている。

「おはよう！」

姉貴の能天気な声が、静寂の中ではやけに大きく聞こえる。

「おはよう。姉さん・・未だ霧が晴れないからしばらくは動けないよ。」

「そうだね。」って言いながら、ザックの中をぐそぐそと漁っている。

やがて、昨日のオニギリの残りを取出して、焚き火の隅に放り込んだ。俺のザックからはトレッキング用の鍋を取出し水筒の水を入れて熾火にかける。

そんな姉貴を見ながら、昨夜の老人の話をしていると、突然姉貴は俺に振り返った。

「少しその話は当ってるかも・・矢上家の古い名前はヤマガミと言うのよ。・・（この辺の山岳信仰を一体化した山神の神官だった）と、お爺ちゃんが言ってたのを覚えてるわ。」

姉貴はそう言いながら焚き火から、オニギリを取出し、ホイルを剥くと鍋に放り込んで、お味噌をニューっとチューブから取出すと鍋に入れてかき回している。

少しづつ霧が薄らいできた。もう、周囲10m以上は確認できる。回りを見る内に、小さな苔生した祠を見つけた。

何となく、昨夜の老人の姿にも見える。そういえば、老人の消えた方向は祠の方向と同じだ。

「はい！」って姉貴が、雑炊モドキをカップに入れて渡してくれる。

薄ら寒い状態で食べる熱い雑炊はとりあえず体を温めてくれる。

「アキト・・・食べながらで良いから、聞いてくれる？」

俺は、先割れスプーンを口に入れながら頷いた。

「昨夜ね、変な夢を見たの・・・変よね。私は寝ていなかったもの。」

いや、十分にお休みでした。と姉貴には言えないのが辛い。

「老人が・・・ぼろぼろの着物みたいなものを着た小さな老人が出てきて、言ったのよ・・・望みを叶えてあげる。って、それじゃあって事で、老いず、病にかからず、どんな言葉も理解できるようにって、言っただけど・・・どうやって確かめたらいいと思う？」

ちよつと待て、今の話ってさっき俺が話したこととリンクしてるじゃないか・・・待てよ・・・もっと重要なことがあったような・・・そうだ、「同行させる」だ。これってどこかに誰かと行くという時に使う言葉だぞ。

「・・・あの・・・姉さん・・・ひょつとして（どこかに行きたい。）って考えたことあるの？」

「あら！・・・良く知ってるわね。・・・偶に思うのよ。（自分達の

力だけで暮らしてみたい。」ってね。」

何気に2人称であることが気にはなったが、ここはスルーしよう。朝日のせいかわ霧が更に晴れていく、もう100m程度先まで見通せる状態にまで回復した。

焚き火を頼りに野宿した場所は、20m程の小さな広場だった。先ほどの祠を祭った址なのだろう。踏み固められているためか木々がこの場所には生えないようだ。

周辺の木々は緑に覆われ・・・？
ちよつと待て！・・・今は秋だぞ！

・・・確かに生い茂っている。季節的には初夏の様相だ。
俺達が来た獣道を探すが何処にも見当たらない。いくら獣道と言っても痕跡すら無くなるはずはない。

懸命に探す、広場の周囲にはやはり痕跡は無かった。
霧は薄れてはいるが未だ遠くの山並みまでは見えてこない。現在位置を特定して、下山する方角を探すとするか。

ようやく、遠くの山並みが薄く霧を通して見えるようになった。
しかし・・・ここは何処だ？

全く見覚えの無い山並みが聳えている。一番高い山は富士山のようにも見える。

「如何したの。アキト？」

呆然と立ち尽くす俺を見上げて、姉貴が訝しげに声をかけた。

「俺達の裏山じゃない！」

俺の声に、姉貴も立ち上がると周辺の山並みを見る。

「・・・何処だろね？」

実に気の抜ける問いではあるが、2人とも見覚えの無い場所だとすれば、此処は何処なのだろう。

「ギョエー・・・」

おかしな声で鳴く鳥が俺達の上を飛んでいく。
雉のように見えなくもないが・・・雉はあんなに空高く飛び回ることは無い。

「アキト・・・ひょっとして、だけど・・・此処は、私達と違う世界かも・・・」

それは、俺も考えていた・・・しかし、それを言ったら姉貴が不安になるかもと、言えない言葉ではあったが・・・姉貴もそう考えるなら、此処は、間違いなく異世界ってことになる。

ガサガサ・・・と音がして向かい側の藪からちいさな動物が姿を現した。

しきりに小さな頭を動かすと俺達に気付いたのか、藪の中に飛び込んでいった。

「見た！」

姉貴は、驚いた顔で俺を見る。

さっきの動物は、よく見る野うさぎのようだったが、長い耳の変わりに角が頭の両側から生えていたのだ。ウサギとは違う動物かもしれないが、角の長さで生えてる位置がウサギの耳のように見えた・・・

「見た！・・・でも、見たこと無い・・・」

あんなのがいたら、パンダ以上の珍種だ。しかも俺の町の裏山にいるなんて聞いたことも無い。

やはり、姉貴の言うように・・・此処は異世界。・・・そして、俺は

姉貴の望みのままに異世界に同行してしまった・・・ということになるのだろうか。

姉貴がザックの中からクロスボーを取出して組立て始める。

肩当のついた台座の左右にカーボン繊維で作られた弓を取付け、先端の滑車に弦を張っていく。

シオルダーバックのような矢筒を首から肩に通して持つと、最後にバックの中から、短刀を取出してベルトに差す。

「ほらほら・・・アキトも準備をする！」

姉貴の行動をあっけに取られて見ていたが、その声で我に返った。ザックの中からグルカナイフを取出し、ジーンズのベルトを緩めてナイフケースを腰の後ろになるようにベルトにしっかりと取付けた。

姉貴を見ると、山菜鎌の鎌を取外して、クナイを柄の先端に取付けている。

ホントに何処まで武器マニアなんだか・・・

「最後はこれね！」

姉貴がザックの中から包みを2つ取出す。

そして大きいほうの包みを俺に差出した。

大きめの赤いバンダナに包まれた物はずしりとした重量がある。バンダナを解いて、現れた物は・・・

「美月姉さん・・・これは、何処で手に入れたのでしょうか？」

現れた物は拳銃だった。しかも、M29の改造品・・・

俗に熊でも一発で倒せるって言う、マグナム44リボルバーだ。

しかも、バレルは7インチ・ガン・スミス特注品と見た。

「バイト、3ヶ月分よ。凄いでしょ。私のはこれね。」

そう言つて膝のバンダナを解くと、現れたのはM36の4インチモデル・やはり特注品だ。

「美月姉さん・日本では、これを持ってないような気がするんだけど・何処で手に入れたの？」

「アレックさんに頼んだら、簡単に買ってきてくれたわよ。」

あの外人・只者ではないと思っていたが・やはり外交官だったのか。

（南の島で泳ごう！）つて誘われて行つた先がグアム・

安宿宿泊かと思つたら、海軍基地の兵舎に泊めてもらった。

そして、昼はひたすら射撃訓練。夜になってようやく泳ぐことができた。

おかげで、南の島に4日も滞在したのに日焼けせずに帰つて来れた。

それを、昨年から何度となく繰り返していた・

ちよつと、待て・そうすると姉貴は此処に来る前から、この日が来ることを知っていた事になる。

装備が増えた事で全体のバランスを取るために、サスペンダーがついた装備ベルトを取出して武器の取付け位置を変更する。

装備ベルトにM29のホルスターを取付ける。グルカナイフは柄が肩位置に来るようにサスペンダーの肩当後方に固定した。最後に、44マグナム実包が6個づつ入った2つのポーチをホルスターの両側に付ければ、今度こそ準備終了だ。

「姉さん・・ひよつとしてだけど・・此処に来ることが解つてたの？」

姉貴は、ベルトにレスキュー用の大型ポーチを取付けていたが、俺の問いにこちらを見た。

「・・解つてたわ。・・あの老人は今まで、何度も現れた・・どうやら、この世界を去るみたいで、縁者の私の願いをずっと聞いてくれた・・私達だけで家のしがらみも無く暮らしたい・・そしたら、叶えてやろうつて・・」

「・・姉さんだけじゃ不安だし・・しかたないか。」

他人だけど・・生まれたときから一緒に居る姉貴と別れるのは願ひ下げだ。

姉貴に交際を申し込んだ相手には何時も言っている。

「俺を越えたら認めてやる！」

おかげで、姉貴が高校へ入学して以来、毎月のようにヤサ男をボコボコにしている。

今の俺がこうしているのも姉貴のおかげだし・・ある意味、姉を超えた感情も少しはあるような気がしないでもない・・

「アキトならそう言うと思つてたわ。・・じゃあ、出かけましよう！」

姉貴は、もう残り火だけになった焚き火を足で踏み潰すと、ザツクを肩に藪の中へ進んで行く。

俺も、急いでザツクを取上げ姉貴の後について行った。

知らない世界

道の無い山中を歩くのは容易ではない。

見知らぬ山なら尚更だ。

山裾と思われる方向に藪を払いながら進んで行く。

俺の前に道は無い。俺の後ろには道はある。という状態だ。

途中の沢で、小休止を取る。冷たい水で顔を洗うと頭までスツキリする。

残り少なくなった水筒に水を補給して、再び下山を始めた。

急斜面の山肌を何度か下りる内に、傾斜を殆ど感じない場所まで来た。

深い森の中を歩いている感じた。

時折、ギャーっという変な声で鳴く鳥達が頭上を飛び交い、何度か猪のような獣（大きな牙が左右に2本づつはえていた）を遠くに見かけた。

「だいぶ、歩きやすくなったね。」

「うん。・・・でも、この森・・・何処まで続くんだろ？」

「歩いてれば、その内出られるわよ。コンパス見ながら同じ方向に進んでるんだから。」

山や森で遭難する原因の一つに方向を見失うことが上げられる。岩や立木を迂回する内に、方向が判らなくなるのだ。俺達は常に一方向、南に向かって進んでいる。

時計の時刻で昼を知り、岩の上で携帯食料を食べる。
固形燃料でお湯を沸かし、コーヒーを作って姉貴と分けて飲む。

「・・・ご免ね。」

「誤る事なんかないよ。良く俺を選んでくれたって感謝したいくらいだし・・・姉さんとは・・・離れたくないし・・・」

いきなり、俺は姉貴に抱きつかれた・・・しかし、此処は岩の上、此処でそんな風に抱きつかれると・・・物理の法則は正しいもので・・・ドシン！と下の藪に2人とも落っこちてしまった。

「・・・ご免ね！」

赤い顔で、とっさに体を入替えて下敷きになった俺から体を離していく。

とりあえず俺は立上がり、店開きした装備をザックに押込み、森の中をまた歩き出す。

今度は姉貴が先頭だ。

姉貴の長い丈のGシャツの背にはザックとクロスボーが乗っている。

あのザックには、分解したクロスボーと2丁のハンドガンそれに弾薬ポーチが入っていたはずだが、それを取り除いた状態であるのにザックはまだ膨らんでいる・・・謎だ。

森の巨木を避けるように姉貴が先導する。

たまに、手元を見るのは、コンパスで方向の確認をするためだろう。

1時間程度歩いていると、前方が少しづつ開けてきた。

立木も細くなり、間隔も次第にまばらになったが、逆に藪が深まったような気がする。

そして、突然に前方が開けた。
草原に出たのだ。

低い段丘がずっと南に続いている。

東と西の景色も森と草原であり、振りかえれば2000m級の山並みが連なり、その奥には、富士山のようにも見える一際高い山が鎮座している。

人家は確認できない。広い視野の中に畑らしきものも存在せず、煙も見えない・・・

「・・・姉さん・・・何も無いみたいだけど・・・」

「・・・そうでもないみたいよ・・・立木に薪取りした痕跡があるわ。」

姉貴は、いつの間にか取出した小型双眼鏡で広い草原を監視していた。

手渡してくれた双眼鏡で確認すると、確かに鋭利な刃物で枝を切取った跡が見える。

200m程東のその場所に俺達は向かうことにした。

草原の草は見た事が無い草だったが、草丈が20cm程であり、歩くのには余り支障にはならず、数分で問題の立木までたどり着いた。

確かに、誰かが意図的に枝を切取っている。

周囲を見ると、森の中に踏み固められた小道が続いており、所々の立木に薪取りの跡が見える。

「誰かいるみたいね・・・」

姉貴の呟きに俺は首を縦に振る。

異世界の住人・・・俺達と同じような姿なのだろうか・・・それとも、目が3つとか、手の代わりに触手が付いてるとか・・・

「たぶん、私達と同じような姿だと思うよ、ほら！」

姉貴の指差した地面には靴の跡があった。

靴跡は、足の大きさが15cm程であり、30cm程度の間隔で交互に続いている。2足歩行をする者で、靴を文化として持っていることが判る。

でも、この大きさと子供ぐらいじゃないか・・・ガリバー旅行記が頭の中に過ぎる・・・

子供位の背丈が標準なら俺達は十分に巨人だ。

さらに草原を注意深く見ると、東に向かって草が踏まれている場所があった。

森は小道を形成していたが、草原では草の勢いが強く、小道までには至らないみたいだ。

姉貴は先に行きたかったようだが、草原に獣がいなくても限らない。

薪の心配が無い森の傍らで今夜も野宿することにした。

2人並んで焚火を見つめる。

携帯食料をコーヒードリッパで流し込むと、後は明日まで交代しながら焚火の番をすることになる。

「姉さん・・・ちょっと、気になることがあるんだけど・・・聞いていい？」

「なあーにかな！」

「姉さんのザック・・・いろんな物を出してもまだ膨らんでるのは

何故かな・・・って？」

「それはね・・・このザックが魔法のザックだからなの！・・・10倍入っても、重さは15分の1・・・いいでしょ。」

「それと、先に言っておくけどアキトの銃とポーチも魔法がかかっているわ。だから壊れることはないわ。弾も1日で6発補充されるし・・・」

「あまり撃てないってことだね。・・・解った。」

だったら、おれのザックもそうしてくれ！と言いたいところだけど我慢するの男の子だって言い聞かされてる。

銃が壊れずに使えることは嬉しい限りだ。1日で撃てる数は最大で18発。しかし次の日は6発になる。M29の威力を考えると大型の獣が対象となる。とりあえず逃げることにすれば、それほど使用する機会は無いだろう。

「はい！」

姉貴が薄い銀色のケースを俺に渡してくれた。

横に小さな突起がある。

突起を押すと、ケースが開き・・・中に5本のタバコが入っていた。

「内緒にしてるみたいだけど・・・知ってるのよ。・・・沢山は入っていないけど、1日にその本数なら許してあげるから。」

ちよつと気まずい思いではあったが、「ありがと！」と返事をし、早速1本を取出して、焚火から枝を取って火を付ける。

ぷかーっつと煙を吐出すのを面白そうに見ていた姉貴は、ザックから小さな袋を取出すとキャンディを1つ口に入れた。

「気分転換を図ってくれるものは必要だねー。」

知らない世界に姉貴と2人で、誰にも会わず2日を過ごしていたことで、確かに少しナーバスになっていたかも知れない。

少し前向きになる必要がありそうだ。

明日は、草原の道らしきものを辿り、人家を見つけよう。薪取りをする以上、火を使う者であるはずだし、切口を見た限りでは金属を加工する技術を持っていることが判る。

原始人ではなく、少しは文明を持った者に合えるかもしれない。そして、俺達を受入れてくれるなら、何の問題もない。

何時の間にか姉貴が寝入っている。

肩に掛かる重みも近頃は気にならない。満天の星空に小さな2つの月が見えている。

どちらも半月だが、寄添うように空に浮かぶ月は俺達2人のようだ。

後、月が30度程移動したら姉貴と交代してもらおう・・・と思い、この世界で2本目になるタバコに火を付けた。

ミアとの出会い

次の朝、草原に残された草の僅かな踏跡を手がかりに東に向かった。

草原の短い草丈のおかげで見通しは良いが、相変わらず人家等は見つからなかった。

突然、先を進んでいた姉貴が立止まると腰を落とし、俺に片手で腰を落とすように合図した。

四つん這いのような姿勢で姉貴に近づくと、双眼鏡を渡され、指先で確認方向を示される。

レンズが捉えたものは・・犬のような獣の数頭の群れであった。しかも、鋭く長い牙を持っている。

種類はかなり違うけれど、サーベルタイガーの犬バージョンって感じた。

「此方が、風下みたいだね。まだ、気付いていない・・」

「大きさは、近所の太郎ぐらいだと思うんだけど・・獰猛みたいよ。」

太郎は近所の老犬だ。確かシェパードの雑種とか聞いたことがある。

今となっては怖くないが、小学生の時は怖くて前を通れずに、姉貴の後に隠れて通っていた。

ここは、触らぬ神に祟り無しの言葉通りに・・ゆっくりと姿勢を低くして進むことにした。

しばらく、四つん這いで進んでいると、草がきれた場所に出る。

道のようなだ。

少しづつ立上がり辺りを見渡す。

誰もいないし・・・さっきの犬モドキも姿を消している。

道の北方向は森に続いており、南方向は草原に続いている。

俺達が辿ってきた踏跡も、どうやらこの道から分かれていたよう
だ。

「こっちだね。」

姉貴は再び草原に向かって歩き出した。

慌てて姉貴の後を追う。

草原を歩くより歩きよい・・・確かにこれは道だ。森を離れないよ
うに緩やかなカーブを描いて東に続いており、尾根を一つ迂回する
ようにも感じられる。

「キャー――！」

突然、かん高い悲鳴が聞こえてきた。

姉貴がその声に反応して駆け出した。

俺も慌てて後に続いて走り出す。

声からすると、小さな女の子のようだが・・・

やがて、森の木立を背にした男が犬モドキの群れに襲われている
のが見えた。

姉貴がM36を引き抜き空に向かって撃つ。

パン・・・パン・・・と銃声が響くと、犬モドキの群れがこちらに向
かってきた。

「来るわよ・・・準備して！」

姉貴の声に、杖を構える。

グアアーっと叫び声を上げて襲ってきた1匹を杖で横なぎに打ちつける。

バギっと、てごたえを感じたからには肋骨をへし折っていると思う。

次の1匹は脳天に杖を振り下ろして頭蓋骨を叩き割った。

3匹目は遠巻きに唸るだけで襲ってはこない。

姉貴も手製の槍で2匹を殺ったようだ。槍先からまだ血が滴っている。

しばらく睨み合いが続いたが、ガオン！っと1匹が吼えると、群れは草原に走っていった。

俺達は恐る恐る、木の根元に倒れている男のところに進んで行く。

首に手を当て脈を確認する。脈はなく胸の上下もない・

体のあちこちに出血が見られる・失血死か・

おれの仕草を見ている姉貴に首を振る。

始めて見るこの世界の住人だ。

姿形は俺達と変わらない。手の指も5本づつ付いている。

服装は・綿ではなく、麻のような手触りの上下を着ており、皮製の簡単な上着を着ている。靴は・これも手作りらしい皮のブーツを履いていた。

「私達と同じだね・少し安心だわ。」

「でも、文化程度は低そうだよ・服飾はこんなだし・」

持物を探すと鉈のような短い剣と背負籠それに男が振るっていた木の棒が転がっていた。

籠の中には、数種類の草と薪の束が入っている。

どうやら、薬草か何かを採取に来て犬モドキに襲われたらしい。
男の遺体をどうしたものか考えていると、傍の立木から小枝が降
ってきた。

ん？って立木を見上げた時、

「キヤー！」

叫びと同時に茂みに何かが降ってきた。

姉貴が槍を構えて恐る恐る茂みに近づいていく。

「アキト！・・・見て、見て・・・かわいいよ！！」

姉貴が茂みから目を離さずに片手でおいでおいでをしている。
なに？ってな感じで、茂みに近づき覗き込むと・・・

女の子だった。10歳前後の女の子だが・・・
頭の髪の毛からピヨコンって耳が・・・ネコ？
ワンピースみたいな簡単な皮服のお尻からは50cm程度の尻尾
が生えている。

小学生ぐらいの背丈だけど、肌は俺達と同じだが髪の毛が青みを
帯びた白だし、耳と尻尾は白色の短毛で覆われている。

木から落ちたショックで目を回してるみたいだけど・・・
姉貴がギューって抱きしめてるから・・・呼吸困難になってるみた
いだ。

顔色がだんだんと青ざめてる。

「姉さん・・・離さないと死んじゃうかも・・・」

俺の声に、ハッ！と気が着いたみたいで、膝に寝かせたが・・・尻
尾をナデナデしている。

俺は、女の子の体を触りながら負傷の程度を確認する。

特に、骨折等はしておらず、木から落ちたときの衝撃で一時的に気を失っただけらしい。

女の子が姉貴の膝で動き始めた。

「ムウウン・・・ハッ!・・・痛ッ!」

目をパチツって開くと、素早く身を起こそうとしたが、どうやら痛みのせいでそのまま横になる。

「・・・もう一人は亡くなったけど・・・襲ってた獣はいなくなっ
たわ・・・もう大丈夫!」

「・・・ところで、貴方は誰?」

姉貴が女の子の背中を撫でながら言うと、

「・・・ミア・・・そうニヤの・・・ご主人様は・・・死んだの・・・」

淡々とした答えだった。

どうやら、女の子は奴隷だったようだ。

主人に命じられて野山の薬草を採取していたが、今日に限って高額で取引される薬草が森で豊作だと聞き、一緒についてきたらしい。主人を失った奴隷がどうなるかは解らないとのことなので、彼女が住む村についていくことにした。

さつさとミアは蔓で編んだ籠の中に、男の持物を入れると近くの犬モドキをジッと見つめている。

犬モドキを指差して俺に聞いてきた。

「・・・ガトル要らニヤイの？」

「・・・要らない。食べられるとも思えないし・・・」

どうやら、犬モドキはガトルというらしい・・・

すると、ミーアは籠から短剣を取出すと、短剣でガトルの犬歯を取出した。

右の犬歯を取出すと、次のガトルにかかる。

俺もグルカナイフを握って残り2匹の犬歯を取ってミーアに渡した。

「ありがと・・・これ、交換できるの。」

ミーアは無造作に籠にポイって入れると、その籠を担ぐ。

「行こう・・・」

姉貴がミーアの手を握って一緒に歩き始める。俺もその後を追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7642y/>

ユグドラシルの樹の下で

2011年11月24日21時50分発行